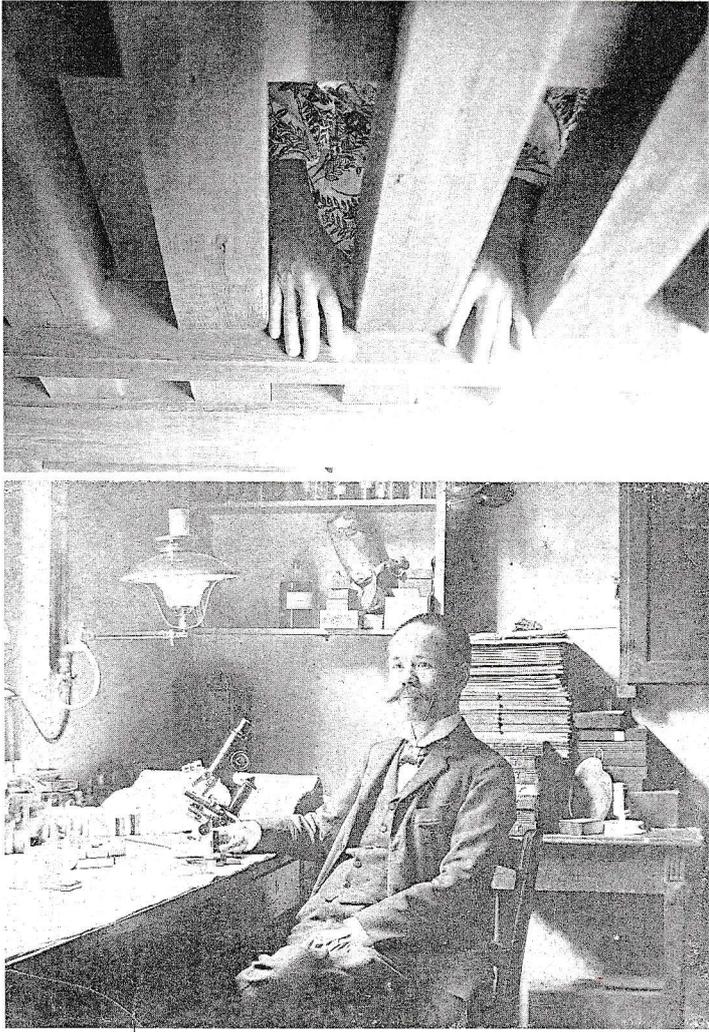


# 精神障害者救済 100年前の奔走

「我が国十何万の精神病者は実にこの病を受けたる不幸の外に、この国に生まれたる不幸を重ねるものというべし」——精神疾患のある人々が置かれた状況を100年前にそう表現した、精神科医・呉秀三(くれしゅうぞう) (1865～1932)の足跡を追うドキュメンタリー映画「夜明け前 呉秀三と無名の精神障害者の100年」が完成した。6月2日から東京・渋谷のアップリンク渋谷で一般公開される。

呉秀三は東京帝国大学医科 広島藩医の3男として江戸大学(現東京大学医学部)教授、東京府巢鴨病院(現東京都立松沢病院)の院長などを務め、日本の精神病学の基礎を築いた人物だ。

・青山に生まれ、帝国大学医科大学卒業後にオーストリアとドイツに留学。帰国後、病院で手かせや足かせ、鎖などの身体拘束具の廃止、開放的な処遇などに取り組んだ。また、当時の精神障害者の多くが自宅の座敷牢に閉じ込められていた「私宅監置」の実態も調査。1府14県にあった364の監置室を視察、監置さ



## 医師・呉秀三の足跡追ったドキュメンタリー

### 来月2日から渋谷で公開

れていた361人について調べた。1918年に報告書「精神病者私宅監置ノ実況及び其統計的觀察」をまとめ、報告書には格子に囲まれた監置室や暗い部屋に裸で横たわる精神障害者の写真なども収録。不衛生さ、衣食の提供や監護の不足などを報告した。

当時、日本では精神障害者を収容する公的施設が不足。不法監禁などを防ぐために1900年に「精神病者監護法」が制定され、行政の許可を得れば合法的に私宅監置できた。呉は私宅監置の状況を厳しく批判、精神疾患を患うと同時に日本に生まれた患者たちの「二重の不幸」を指摘。さらに「精神病者の救済・保護は実に人道問題にして、我が国目下の急務と謂はざるべからず」と記した。呉の精神は、50年の精神病者監護法廃止につながった。

映画は、障害者の共同作業所の全国組織「きょうざれん」(中野区)と日本精神衛生会が、調査報告書の刊行100年を記念して企画した。

最近、大阪府で長年自宅に監禁されていた女性が衰弱死したり、兵庫県で男性がプレハブに20年監禁されていたりした事件が明らかになった。現代日本の精神科医療は国際的に見て病床数が極めて多く、入院期間も長い。呉の研究を続ける精神科医の岡田靖雄さん(87)は「国が戦後、民間病院に任せきりにした結果」と指摘。映画では「いまになつては病院監置と言った方がいい状態が続いている。身体拘束も増えている。呉先生が生きていたら、『俺の後の連中は何をやってるんだ』って怒ると思う」などと語っている。

きょうざれん専務理事の藤井克徳さん(68)は「いまの日本の現状と重ね合わせて見てほしい。歴史はいまを変えるためにある」と話している。

映画は66分。ナレーションは俳優の竹下景子さん。上映は6月2～7日午前10時半、8日午後3時25分、9～15日は未定。上映についてはアップリンク渋谷(03・68225503)、自主上映や作品についての問い合わせはきょうざれん(03・55080050・22223)へ。

①当時の監置室をイメージした映画の一場面  
②映画の一場面。ベルリン留学時の呉秀三  
③いずれも製作委員会提供